世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『インドからの手紙』

第９話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第9話「インドからの手紙」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ラビニア
アーメンガード
ロッティ
ジェシー
ガートルード
ピーター
ベッキー

モリー（エンマを改名します）

ジェームス

ケーキ屋の主人

エミリー（人形）

シーザー（猫）

ボナパルト（オウム）

ジャンプ（小馬）

1 セーラのファンタジー

緑の深海を、真珠で編んだ網を曳いて静かに泳ぎ廻る
美しい人魚たち――
光り輝く洞窟の白い岩の上で、その彼女たちを眺める
王女と、王子――
セーラの声「……そして、海の王子さまに愛されて、海底の光り輝
く洞窟の中で暮す事になった王女さまは、いつまでも
幸せな毎日を送ったのです……」

2 ミンチン女学院・遊戯室

うっとりと聞くアーメンガードや、ロッテイ、年少組
の女生徒たちに囲まれて、自作のお話を終るセーラ――
アーメンガード「すてき……セーラのお話」

ロッテイ「私、王女さまになったみたい……」

　　微笑で頷くセーラ――

セーラ「私も、お話を聞いたり、本を読んだりする時、いつもその主人公になったつもりになってしまうの……だけど、その、つもりになれる事が、お話や本の、とてもすてきな所だと思うわ」

ロッテイ「そうよ、そうよ」

アーメンガード「ほんとね。私、もっと本が好きになりたいけど」

セーラ「なれるわよ、アーメンガード。ほら、本が好きになった、つもりになるのよ」

アーメンガード「まあ……」

　　笑う一同――

　　その時、離れて集っていたラビニア、ガートルード、ジェシーが振向く。

ラビニア「うるさいわね！　いい加減にしてよ。その馬鹿気たつも

り遊び」

立上るとセーラの方に近づく。

顔を見合せて、後ろに続くガートルードとジェシー。

ラビニア、威丈高にセーラを見下す。

ラビニア「お母様が云ってたわ。そのつもりになるなんて、悪いくせだって……」

茫然と立上るセーラ――

ラビニア「美人のつもり、偉くなったつもり……あなたのプリンセスになったつもりだって、ただの思い上りなだけよ」

セーラ「（怒りを押える）私……プリンセスになったつもりだなんて、云った事はなくてよ」

ロッテイが前に出る。

ロッテイ「そうよ。セーラは、私のママになったつもりなだけだもん」

ラビニア「うるさいってば。泣き虫は黙って」

セーラ「ラビニア……私、あなたとは、ずっと前から仲良しになりたいと思っていたけど、そんな云い方をするなんて、許してあげられなくなるわ」

ラビニア「フン。代表生徒になったからって、年上の私にお説教する気」

ロッティ「ラビニアなんて、いじめるだけだもん」

いきなりラビニア、ロッティを平手打ち。

ロッティ「うわあん……」

セーラ「なにするのよ……」

咄嗟にかばい、鋭くラビニアを見る。

セーラ「私、今、あなたに、どれだけ、怒りを……（唇が震える）」

ラビニア「殴る気？　私を……」

セーラ「え、ええ……好きではないけど、本気で、あなたを叩きたいくらい……」

ラビニア「殴るなら殴ってごらんなさいよ」

怒りが爆発しそうに、ラビニアを激しくみつめるセーラ、ふっとその肩がゆるむ。

セーラ「叩いたわ……たった今、あなたの心の中で……」

凝然と見返すラビニア。

セーラ「そうよ、叩いたつもりで、あなたを許してあげるのよ……」

ラビニア、冷笑するとガートルード、ジェシーを促して、出て行く。

見送ったセーラ、吐息で、泣きじゃくるロッテイを抱き寄せる。

心配そうに囲むアーメンガードたち。

セーラ、呟くように洩らす――

セーラ「私が……いけなかったのかも知れない……」

驚くアーメンガードたち――

アーメンガード「どうして?……悪いのは、あなたではなかったわ」

セーラ、微かに首を横に振る――

セーラ「私が、ほんとうに、プリンセスになったつもりになればよかったのよ」

怪訝に見るアーメンガードたち。

セーラ「そうすれば、あのひとの喧嘩を買ったりせず、もっとプリンセスにふさわしい話合いが出来たのだと思うわ」

訳もなく感動するアーメンガード。

アーメンガード「すごいわ、セーラ。私なんて、とてもそんなふうに深く考えられないもの」

セーラ、ぱっと明るく気分を変える。

セーラ「ね、みんなで、パーティを開きましょうか」

アーメンガード「え……？」

セーラ「学校中のみんなが、仲良しになるパーティよ。勿論ラビニアも招待するわ」

アーメンガード「えええ？」

セーラ「大丈夫、私、院長先生にお許しを頂いて来るわ」

3 同・院長室

ジロリとセーラを見るミンチン、傍にアメリア。

ミンチン「なんですって？……あなたの部屋で、お茶のパーティを……」

セーラ「はい。それで買物に行く事を許可して頂きたいのですが」

アメリア「まあ、面白そうね、私も是非お呼ばれ……」

ミンチン「アメリア！」

4 同・廊下

ドアの前で、心配そうに待っているアーメンガードたち——

その前を、ジロリと見て立ちふさがるシーザー。

5
同・院長室

勿体つけて歩き廻るミンチン、セーラに

ミンチン「成程……代表生徒として、学校内全員が仲良くなるよう考えるのは、悪いことではありません。特に許可致しましょう」

セーラ「有難うございます、院長先生」

6
同・廊下

ドアが開き、出て来るセーラ。

アーメンガード、ロッテイたちが取囲む。

アーメンガード「どうだった?」

セーラ「あなたは私とお買物よ。ロッテイは皆に声をかけて」

ロッテイ「うわあい……!」

跳び上った拍子に、シーザーの上に……ギャア。

7 同・馬車置場

ジャンプに人参を喰べさせているピーター。
マリエットが駆け込む。

マリエット「ピーター、お嬢様がお出掛けよ。直ぐ馬車の用意をして！」

ピーター「おっと、判りました！」
マリエット、去る——

ピーター「さあ、ジャンプ、お嬢様のためにひと働きだぞ」
嬉しそうにいななくジャンプ——

8 町の通り

ピーター、ジャンプの馬車に乗って行くセーラとアーメンガード。

9 ケーキ店の表看板

その下にピーターの馬車が停っている。

10 同・店内

ケーキの飾り棚を択んでいるセーラとアーメンガード。

セーラ「ええと、そのクルミを飾ったチョコレート・ケーキを十六と、それから、そっちの大きなミートパイをひとつ……」

主　人「ミートパイの方は、ひとつでよろしいのですな、お嬢さん」

セーラ「ええ、別に包んで。お願いね」

主　人「承知致しました、お嬢さん」

アーメンガード、怪訝にセーラを見る。

アーメンガード「ね、どうして?……どうして、ミートパイだけひとつなの」

セーラ「(微笑)あれはね、もう一人の仲良しのお友だちの分……」

アーメンガード「へええ……(判らない)」

11 ミンチン女学院・台所

水桶を運んで来たベッキーが、けつまづいて桶ごとジェームスの足許に転がる。

ベッキー「ひやァ!」

ジェームス「うわッ、つ、つめてえじゃねえか、このトンマ!」

転がった手桶を蹴る。

その手桶が、転がったベッキーにもろにぶつかる。

ベッキー「お、お許し下せえまし……」

はいつくばって詫びる前に、モリーが近づくと威丈高
に見おろす。
モリー「ベッキー！……何度ヘマすりゃ気がすむんだよ！　今夜の
食事は抜きだからね。早く掃除おし！」
ベッキー「は、はい……」
涙顔で、その場にはいつくばって辺りを片附けはじめ
る。

12　同・表

軽やかにジャンプの馬車が着き、買物包みを抱えたセ
ーラとアーメンガードが降り立つ。
セーラ「ありがとう、ピーター」

13　同・ラビニアの部屋

じっと窓下を見おろしているラビニア。
ドアが開き、ガートルードとジェシーが入って来る。
ジェシー「ね、なんだか、みんな、セーラの部屋に集まってるみたいよ」
ガートルード「ほかの部屋の子、全部よ。なにをする気かしら」
ラビニア、振返る。
ラビニア「私たち三人を、仲間外れにする気よ」
ガートルード「ええッ」
ガートルードとジェシー、顔を見合せる。
ラビニア「セーラがやらせてるのよ……やれるならやってみるといいわ。誰がほんとうにこの学校の代表だか、思い知らせてあげるから」
その時、ノックの音。
ジェシーたち、はっと振返る。
ガートルード「はい……」

ドアが開き、微笑のセーラがのぞく。

セーラ「ごめんなさい……一寸いいかしら」

ラビニアたち、無言で見返す。

セーラ「これから、私の部屋で、みんなでお茶のパーティを開くの。

みなさんも来て下さらない？」

ラビニア、無言。

ジェシーとガートルード、顔を見合せる。

セーラ「じゃ、お待ちしてるわね」

セーラ、微笑を残して去る。

茫然と見送るジェシーとガートルード。

ラビニア「（冷笑）今度は、お茶のパーティで人気取りよ」

ガートルード「（ポツン）仲間外れじゃなかったのね」

ジェシー「ウッ、セーラにもいい所があるわ」

ガートルード「うん、代表生徒になっても、ちっともいばらないし

……」

ジロッと見るラビニア――
ガートルード、慌てる。
ガートルード「い、いいえ、あなたのこと云ったんじゃなくてよ」
ラビニア「あなたたち、私より、セーラの方が好きになったのね」
ガートルード「ち、違うわ」
ジェシー「そんなことなくてよ、ラビニア」
ラビニア「行きなさいよ、セーラのお茶のパーティとかに……」
ジェシー「え……」
ラビニア「私、別になんと思ってもいないわ」
顔を見合せるジェシーとガートルード。
ジェシー「じゃ……一寸、様子だけね」
ガートルード「すぐ戻るわ」
二人、解き放たれたように、いそいそと出て行く。
見送ったラビニア、じっと考える――
――C・M――

14

同・セーラの部屋

——お茶のパーティ。
ロッテイは、エミリーを抱いて安楽椅子に——セーラとマリエットは、テーブルを囲んで椅子、ソファにつ いたアーメンガードたちに、忙がしく紅茶とチョコレートケーキのもてなしをしている。
——ノックの音。

セーラ「はあい……」
急いでドアに行き、開ける。
立っているジェシーとガートルード。

セーラ「いらっしゃい、さ、どうぞ」
二人を迎え入れたが、ラビニアがいないのに気がつく。

セーラ「ラビニアは？」
ガートルード、ジェシーと顔を見合せると、

ガートルード「来たくないらしいの」
セーラ「まあ……」
ジェシー「知ってるでしょ。あなたのこと、好きじゃないのよ」
セーラ「え、ええ……」
ガートルード「ね、セーラ……私たち、ほんと云うと、前からラビニアが好きじゃなかったのよ」
セーラ「え……?」
アーメンガードたちも、一斉にジェシーとガートルードたちを見る。
ガートルード「だって、すごくいばるし、云う事を聞かないといじめるんですもの」
ジェシー「だから、私たち、これからは、あなたと仲良しになる事にしたの」
ガートルード「もうラビニアなんて、大嫌いよ」
セーラ、困惑して打ち消す。

セーラ「い、いけないわ、そんなことを云っては……」

怪訝に見るジェシー、ガートルード、アーメンガードたち。

セーラ「このパーティを開いたのも、ラビニアとも仲良くしたかったからなのよ」

ざわめく一同――

セーラ「いいわ、私、ラビニアを誘って来る」

ガートルード「え、困るわ、セーラ」

ジェシー「待ってよ、セーラ」

セーラ、ドアへ行くと開ける。

一瞬、はっと立尽す――

――凝然とセーラをみつめて立っているラビニア。

ジェシー、ガートルード以下、室内の眼が愕然とラビニアを見る。

セーラ、咄嗟に微笑を取り戻す。

セーラ「いらっしゃい、ラビニア……あなたを待っていたのよ。さ、
　　席がとってあるわ、どうぞ」
　　セーラ、ラビニアを招じ入れる。
　すっと入って来たラビニア、ジェシーとガートルード
　を冷く一瞥すると、セーラに向い立つ。
ラビニア「私、このパーティのお客に来た訳じゃないわ」
　はっと見るセーラ――
ラビニア「あなたに、ほんとうの事を教えてあげに来たのよ」
セーラ「ほんとうの事って？」
ラビニア「あなたが、なぜ私に代って、代表生徒になれたかって事
　よ」
　凝然とラビニアを見るセーラ――
　成行に、囁き合う女生徒たち――
　セーラ、やっと冷静を保つ。
セーラ「ラビニア……そう云うお話なら、今ではなくて、あとでう

かがった方がいいと思うわ」

ラビニア「いいえ、みんながいる前で話してあげるわ」

セーラ、じっとラビニアを見返す。

ラビニア、かさにかかる。

ラビニア「よくって。あなたが代表生徒になれたのは、あなたが私よりすぐれているからでもなんでもないわ。あなたが、お金持ちの娘だからよ。だから、あの欲張りのミンチン院長が……」

セーラ「ラビニア……」

その時、ノックの音。

一同、はっとドアを見る。

アーメンガード「ミンチン先生よ」

セーラ「(ドアに)はい……」

ドアが開く——入って来たのは、アメリア。

アメリア「まあ、皆さん、どうなさったの?……もっと大騒ぎして

ると思ってましたのに」

セーラ「（困って）え、ええ……」

アメリア「（微笑）セーラさん……」

セーラ、見上げる。

アメリア「はい……」

と、後手に持っていた封筒を差し出す。

アメリア「インドのお父様から、お手紙よ」

セーラ「まあ……有難うございます、アメリア先生」

途端に、ロッテイが駆け寄る。

ロッテイ「わァ、いいなァ、ね、読んで」

セーラ「え……」

アメリア「（微笑）そうね……セーラさん、よかったら、どんなお手紙だか、みんなに話して下さらない？」

一同、わっと歓声をあげる。

セーラ「は、はい……」

マリエットが鋏を渡し、セーラ、封を切る。

集るアメリアと女生徒たち。

× × ×

その一方に、取り残されてみつめるラビニアと、去就に迷うジェシー、ガートルード。

× × ×

女生徒たちに囲まれて、手紙を目読するセーラ、眼が輝く。

セーラ「まあ……お父様が……」

ロッティ「ね、ね、お父様がどうしたの?」

セーラ「あのね、お父様が、インドで、お友達と、ダイヤモンド鉱山の事業に乗り出しているんですって」

アメリア「(驚く)まあ、ダイヤモンドの鉱山……」

わっと一同の嘆声がまき起る——

× × ×

驚くガートルード、ジェシーと、じっと動かないラビニア。

15 同・前の廊下

ミンチンの部屋から出て来たベッキーが掃除道具を手に、重い足取りで通りかかる。
ふとドア前で、足を停める。
――セーラの部屋から女生徒たちの歓声。
ベッキー、また力なく疲れた足を曳いて階段を降りて行く。

16 同・セーラの部屋

アメリア、女生徒たちに囲まれているセーラ。

アーメンガード「すごいわ。じゃ、セーラのお父様は、もうすぐダイヤモンド王なのね」
セーラ「まあ、そんな……」
ロッテイ「そうよ、そうよ。そしてセーラは、ダイヤモンド王のプリンセスになるのよ」
歓声をあげる一同——
アメリア「おめでとう、セーラさん……なんて素晴らしいお手紙なんでしょう。私、この事を院長先生にお話して来ますわ」
セーラ「え、院長先生に？」
アメリア「ええ、院長先生もきっと大喜びされるわ」
アメリア、急いで出て行く。
再びセーラを囲んで騒ぐ女生徒たち。
×　×　×
じっと見守っていたラビニア、ガートルードとジェシーに、

ラビニア「（低く）帰るわ」

一瞬ためらう二人――

ラビニア「帰るのよ！」

決めつけてドアへ――二人、仕方なく続いて出て行く。

17

同・ミンチンの部屋

驚くミンチン――

ミンチン「なんですって、セーラの父親、いえ、あのクルーさんが……？」

前に、勢い込んだアメリア――

アメリア「ええ、お姉様……手紙の様子ではインドで有望なダイヤモンド鉱山を手にお入れになったとか……」

ミンチン「（茫然）ダイヤモンド鉱山……」

アメリア「ええ、いずれセーラさんは、そのダイヤモンド王の後継

ぎになるのですわ。お姉様が期待してらした通り、この学校は素晴らしい後援者を持つ事になったんです……ね、お姉様、聞いていらっしゃるんですか……」

ミンチン「（茫然）あの子が、ダイヤモンド王の後継ぎに……」

18 同・台所（夜）

驚く夜食途中のジェームスとモリー。

ジェームス「ひゃあ、すると、あの子は、世界一の大金持のお嬢様になるって訳か」

前に来ているマリエットと、ピーター。

マリエット「ええ、生徒さんたちも、その話で大騒ぎ。私も夢みたいな気持ちよ」

ピーター「ぼ、ぼくもだよ。ダイヤモンド王のお嬢様の馬車を動かすなんて、凄いや」

モリー「よかったねえ、あんたたち、あのお嬢様の専属でさ。これからも私たちと仲良くしとくれよ」

19 同・ドア外の廊下（夜）

両手一杯に、女生徒たちの靴を抱えたベッキーが、茫然と立尽して聞いている。

ベッキー、そっと作業室へ——

20 同・作業室（夜）

作業台に並べた女生徒たちの靴——

ベッキー「（呟く）あのお嬢様が、とうとう本物のプリンセス様に……」

はっと我にかえり、靴にブラシをかけはじめる。

21 同・セーラの部屋（夜）

ランプの灯で、じっと父の手紙を読み返しているセーラ――

ふと階段を上って来るベッキーの木靴の重い足音が聞えて来る。

はっと気がつくセーラ――

22 同・廊下（夜）

空腹と疲れの重い足取りで上って来るベッキー――

ドアが開き、セーラが出る。

セーラ「（低く）ベッキー……」

ベッキー「あ、お嬢様……」

セーラ「シィッ……」

と、ミンチンの部屋を気にし、招き入れる。

23 同・セーラの部屋（夜）

ベッキーと入るセーラ——

セーラ「あなたの通るのを待っていたのよ。さ、坐って」

ベッキー「有難うございます、お嬢様……」

よろめくように椅子に坐る。

セーラ「ベッキー……どうしたの？　仕事が辛かったのね」

ベッキー「いいえ、仕事が辛いのは、馴れましたです……でも、今日は、叱られて……食事を食べさせて貰えなかったんです」

セーラ「まあ、なんてことを……待ってて」

セーラ、急いで棚から包みを取ると、ベッキーの前に出す。

セーラ「さ、ミートパイよ。遠慮なく召上って」

ベッキー「まあ、お嬢様……じゃ、遠慮なく頂きますです」

セーラ「ええ、どうぞ」

ベッキー、包みをあけ、パイをひと口食べる。

ベッキー「わあ、おいしい……」

セーラ「(微笑)よかった……きっとあなたが好きだと思って……」

ベッキー「有難うございます……これは、おいしくて、その上、おなかが一杯になりますです」

ベッキー、またひと口食べる。

ベッキー「この前頂いたケーキも、とてもおいしかったけど、なんだか、おなかの中でとけてしまうみたいで……この方が、おなかにたまって、私には嬉しいです」

セーラ「そう……おなかがすいてたまらないって、私にはよく判らないけど、きっととても辛い事なのね」

ベッキー「そりゃ、お嬢様、おなかがすくのばかりは、馴れる訳に行かないですもの」

セーラ「まあ……」

二人、思わず笑う――

ベッキー「あ、お嬢様……先刻、下で聞いたんでございます。ダイヤモンドのお話を」

セーラ「え……」

ベッキー「おめでとうございます。お嬢様が昔見たプリンセス様におなりになるなんて、私、嬉しくて……」

セーラ、微笑で首を振る。

セーラ「ベッキー……私、その事で皆が騒ぐほど夢中で喜んでる訳ではないのよ」

ベッキー「えっ……」

セーラ「そりゃ、お父様の事業が成功して下さるのは嬉しいけど、それで私が変る筈はないと思うわ。私は、今まで通りの私、セーラのつもりよ」

ベッキー「お嬢様……」

セーラ、はっと時計を見る。

セーラ「いけない、あなたの眠る時間を潰してしまうわ――」

ベッキー「はい、では残りは、部屋に戻ってたのしみに頂きますです」

セーラ「ええ、どうぞ……」

ベッキー、パイを包みながら、

ベッキー「でも、部屋で食べる時は、気をつけなくちゃいけないんです。食べクズを落しておくと、きっとネズミが出ますから」

セーラ「まあ、あなたのお部屋、ネズミがいるの？」

ベッキー「ええ、沢山……屋根裏部屋には、たいていネズミがいるもんです。でも、もう、ネズミの走り廻る音には馴れましたです。私の枕の傍を走ったりしなければ……」

セーラ「まあ、馴れるだなんて……」

ベッキー「（微笑）だって、お嬢様……私みたいに貧しく育って来

たら、なにになだって馴れるしかありませんですもの」

みつめて微かに頷くセーラ――

24 同・廊下（夜）

ドアを出て、見送るセーラに叩頭して、屋根裏部屋へ向うベッキー。

セーラ、じっと見送る――

セーラのM「屋根裏部屋に住んでいるベッキー……お父様のダイヤモンド鉱山の事で騒がれている私……生れた時の偶然でしかないその運命を思って、私の心は深い悲しみに沈んでいました……」

おわり